

令和7年度 研究総論（研究4年次）

研究主題



1 はじめに～本校の学校教育目標と教育観～

その子がその子らしく生き、彩りあふれる自分や豊かで幸せな未来を、自らつくっていってほしい。私たちは学校教育目標「自らをきりひらく子」のもとで、子ども一人ひとりにそのような願いをもち、子どもがその子らしさを輝かせながら学ぶ姿を支えたいと考えている。

私たちは「子どもは自らの内に伸びようとする芽をもっている」という子ども観に立ち、「とらえ・願い・かかわる」ことこそが、子どものもつ芽を支えるための教師の役割であると考えている。その出発点となる「とらえ」は、基礎的・基本的な知識・技能をいかに身につけているか、教科の見方・考え方を働かせているかということだけではなく、その子がいまをどのように生きているか、というその子ならではの見方や考え方、感じ方、価値観をみていくことである。子ども一人ひとりがその子らしさを表出しながら学び、その子らしさが磨かれていく営みは、その子の「とらえ」に基づくことで実現する、私たちの目指す教育である。目の前の子どもと、ともにつくる二つとない授業にこそ、真の学びが生まれるのだと考えている。

2 研究主題設定の理由～前研究『夢中になる』を経て、確定に至るまで～

前研究『夢中になる』では、「〇〇したい」の先にあるその子の目的に着目することで、『夢中になる』対象やタイミング、プロセスは子どもによって違いがあるものの、子どもは、その子らしさをあらわにしながら語り合ったり表現し合ったりして、熱を帯びていくことが分かった。

私たちは、このようなその子らしさがあふれる姿に魅力を感じるとともに、その姿の背景に目を向け、子どもの内面に寄り添った研究を一層大切にしていきたいと強く考えるようになった。また、授業において、その子にとってその材との出会いがどのような意味をもつのか、その子に何を願ってそのかかわりをするのか、といった教師の役割の具体についても問い合わせることの必要性を感じた。

これらのことから、研究主題を『その子らしく学ぶ』と設定し、目の前の子どもと真摯に向き合い、『その子らしく学ぶ』子どもを支えていくことで、子どもという存在がもつ可能性や在るべき教育の原理を追究する研究を進めていきたいと考えた。

そこで研究1年次は『その子らしく学ぶ』という言葉のもつ可能性を広く捉え、研究主題として設定する価値について吟味していく必要があると考え、授業実践を行った。そして、抽出児の学びのプロセスを追い、『その子らしく学ぶ』を見つめていく中で、子どもには、その子の見方や考え方、価値観などの、その子の背景にあるもの、その子をかたちづくるものなどが「その子らしさ」として存在していることが明らかになった。さらに、目的に向かって前進していく中でそれらが自然とじみ出たり、それらを発揮したりしながら材や事象などの対象を自分自身と結びつけ、意味づけながら学んでいくことも見えてきた。同時に、こうした学びのプロセスの中に、子どもにとってのよさにつながる可能性を確認できたことで『その子らしく学ぶ』を研究主題として確定し、研究を進めていく価値は十分にあるという考えに至った。

3 研究2年次、3年次を経て見えてきたもの

(1) 研究2年次のあゆみ～“その子が、自分と対象とを結びつけながら進んでいく”という見方で～

子どもは、目の前の材や事象などの対象を自分自身と結びつけ、意味づけながら学んでいく。そして学びを自分のものにしていく中で得るものや、学びのプロセス自体が「その子らしさ」としてその子に還っていくのではないかと考え、研究2年次は、各教科部で見えてきた『その子らしく学ぶ』を共有し、“その子が、自分と対象とを結びつけながら進んでいく”という共通の見方をおいた。

その見方で子どもの学びのプロセスを追うと、子どもは、自分と対象とを結びつけながら進んでいく中で「うまくいかなさ」などのその子ならではの状況^{※1}と向き合っていることが見えてきた。状況と向き合う子どもは「自分の見方」を充分に働かせ、自分と対象との結びつきを強くしていく。このようなプロセスの中に生じる「心の動き」がきっかけとなり、その子の思考や言動に変容が起こる。この一連のプロセス（以下、「心の動きを伴う経験」とする）に目を向けることは、その子の学びをより詳らかにとらえることにつながるとともに、「子どもが学ぶとは、どういうことなのか」という問い合わせにも一定の解を示すものになるとを考えた。（図1）また、こうした心の動きを伴う経験は「その子らしさ」に還っていき、『その子らしく学ぶ』をより豊かにするのではないかという可能性が見えてきた。



図1 「子どもが学ぶ」という営み

こうして見出した価値や可能性の中でも『その子らしく学ぶ』子どもの「心の動きを伴う経験」に着目していくことが、子どもの学びの解像度を上げることにつながるのではないかと考えた。

※1 対象と関わる中で生まれる、複数の子どもに共通する「状況」に対して、「その子らしさ」が影響して、その子ならではのものとなっている状況を「情況」と表現している。

(2) 研究3年次の視点から見えてきたもの

研究3年次は、次の視点をもって子どもの学びのプロセスをよりつぶさに見ていくこととした。

心の動きを伴う経験によってその子に還るもの

この視点をもって令和6年6月に【5年国語科「『生きる』を読む—命がねがい求めるものー」（キツネとねがいごと）】の実践を行った。

まず、その子にとっての「心の動きを伴う経験」に目を向けると、心の動きはその子の学びのプロセスの随所に見られた。どのように心が動いたか、なぜ動いたかを「その子らしさ」とも関連付けて分析していくと、その具体が徐々に明らかになってきた。

本実践における抽出児は、自分と様々な対象とを結びつけながら進んでいく中で、対象がもつ魅力や他者の解釈・価値観に対するズレがあるという状況と出会った。その状況はその子がもつ背景や、見方や考え方などの「その子らしさ」が働いて認知され、その子ならではの状況となった。例えば、「他者とのズレがある」という状況は、ある子どもにとって「自身の解釈を確かなものとするために解消しなければならないことがある」とい

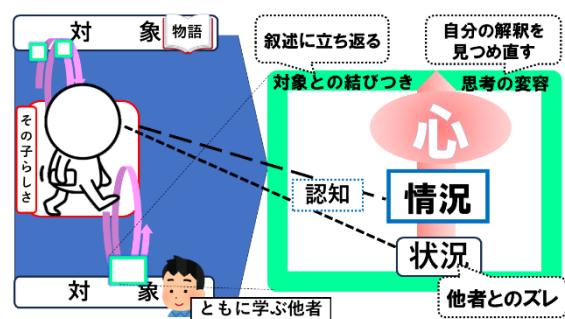


図2 本実践から見られた「心の動きを伴う経験」の具体

う情況であり、不安や困惑、切実感のような心の動きがあった。そういった心の動きの先には、その子と対象との結びつきの変化や、思考の変容といった、その子の学びがさらに進んでいく様子が見られた。このように「心の動きを伴う経験」の具体が明らかになり、その先にはその子ならではの学びがあることが見えてきた（図2）。

以上を踏まえ、「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」を視点に、各教科部においても実践を行った。結果、子どもの学びについて以下のようなことが見出された。

- (ア)『その子らしく学ぶ』子どもは、「教科の学び」をよりその子の学びとして豊かなものにしていく
- (イ)子どもが『その子らしく学ぶ』ことは、他者の『その子らしく学ぶ』に影響する
- (ウ)『その子らしく学ぶ』中に見られるその子ならではの多様な学びが、その子の中でどのように関わり合っているかに目を向けていくことは、『その子らしく学ぶ』ことの、子どもにとってのよさをさらに見出すことにつながるのではないか

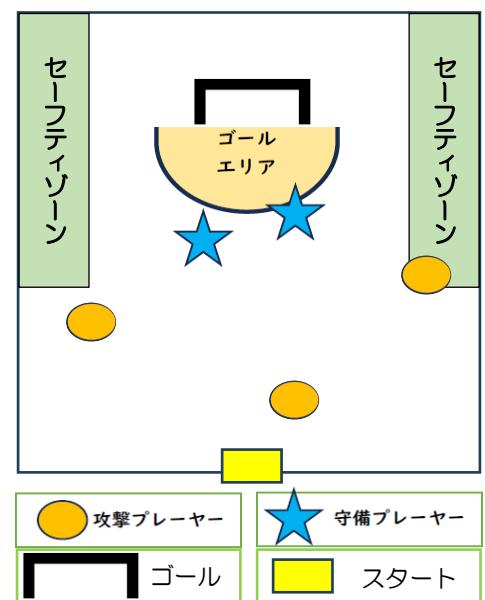
「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」を視点として子どもの学びのプロセスを追っていくと、その子ならではの学びがより詳らかになってきた。例えば国語の実践では、同じ物語を読み、学級として共通の問い合わせをもって進んできた子どもであっても、ある子は場面や言葉の解釈を変容させ、ある子は心情の解釈の変容や自身の人生観をも見つめ直すことを通して、物語の解釈を深いものにしていった。これらはどちらも「教科の学び」であるが、その子にとって学びが意味するものは異なっているということが分かる。心が動き、思考を加速させたり対象との結びつきを強めたりして進んでいくことで、その子の学びは豊かなものになっていくと考えられる。

4 研究4年次～研究授業（R7.1、2月の実践）から見えてきたこと～

前項（ア）のように、その子の学びが豊かなものになっていくプロセスに目を向けると、（ウ）に挙げるような、その子ならではの多様な学びが存在していることが可能性として見えてきた。例えば、教科の特性に含みきれないような、目的に向かう誠実性、他者に対する共感性、自己調整や粘り強さといった力を働かせながら学び進めていく、人間性の涵養につながる学びもその一つである。それらを含めた多様な学びの具体を探るために、研究4年次の初めとして【6年体育科「いかに攻め切るか？いかに守り切るか？～ネオホッケー～」（E ボール運動 ゴール型）】の実践を行った（図3）。2名の抽出児を設定し、体育科の授業における『その子らしく学ぶ』子どもの多様な学びを広く、そして深く見とり、学びと学びの関連性について目を向けていくこととした。

ネオホッケーに出会ったA子は、スティックの持ち方やボールの打ち方について気付きを得ていった。多くの子どもが両手で持つ中でA子は右手だけでの試行を続けた。「片手の方がコントロールしやすい」「向きを変えやすいんだ、私」と片手打ちの選択に意味づけを行い、自分の動きとして高めていった。

ゲーム形式の活動になるとA子は守備の動きについて迷いや不安を表出す。単元序盤の2 on 1 ゲー



※セーフティゾーンは、攻撃プレーヤーのみ入ることができる。
※ゴールエリアは、どのプレーヤーも入れない。

図3 ネオホッケーコート図

ムでは守備者が1人で守らなくてはいけないことがA子ならではの情況となり、「取りにいかない方がいいよな」「ええ、これって何だこれ、どっちか分かんないんだけど」と前に出るべきか、引いて守るべきかで迷いながらも、A子はゴール前で守備をすることを選択し、いくつかの失点を防ぐ経験をする。また、A子はチームメイトであるN男の積極的に前に出る守り方を目にしたり体感したりしたことに加え、T子に働きかけることで助言を受け、自らの守備の動きを変容させていった。ボール保持者との距離を徐々に詰めるようになったA子は他チームとの対戦で無失点に抑えることができ、「やったあ！」と喜びを表出し、守り方に対して手応えを得た。これ以前にゴール前で引いた守り方でも守備に成功していたことから、A子は、ゴール前で引いた守り方と、ボール保持者に詰める守り方の双方の有効性を感じていく。単元中盤で3 on 2ゲームに移行すると、守備者が2人に増えることを知ったA子は、それまでの経験から、1人は前に出てもう1人はゴール前に立つ守り方を見出した（図4）。特にゴール前に立って守ることの多かったA子は、思うようにシュートを止められない場面が続き、相手や味方との位置関係に応じてボール保持者に詰める守り方もするようになっていった。よりよい守り方を思考し続けるA子は、これらの守り方を一緒に出場するチームメイトとの関係性や動きに応じて選択するようになった。単元を通して、時に立ち止まって考えてきたからこそその気付きや実感がA子の学びに影響を与えていた。

攻撃においては、シュートに対する自信のなさやボールを失うことへの不安からか、A子はまずパスをつなぐことに重点を置いた。「パスをする時にどれくらいの距離が一番いいか分かった」という発言から、パスをつなぐために位置関係に着目して思考していることが分かる。それによってパスがつながりはじめた感覚を得たA子は、チームメイトとの共有の中で自身が働かせてきた見方や考え方を表出するようになった。こうしてパスの動きや位置関係に思考を巡らせてきたA子は、パスが通る状況のとき攻撃の立ち位置が三角形であることに目を向けた。セーフティゾーンの活用方法や三角形の立ち位置を保つことの有用性にも実戦を通して理解を深め、個人だけでなく、チームとしての動きも高めていった。自身のパスでチームメイトがゴールを決めたこともA子の表れの支えとなっていただろう。このようにA子は攻守において他者との有効な距離感を見つけていき、状況に応じたスペースの使い方を変容させていった。

ネオホッケーに出会ったB男は、ドリブルやパス等の動きをくり返し試行していった。それまでの体育での表れや、サッカーを中心に運動の経験が豊富なB男の背景もふまえると、運動経験をもとにネオホッケーにおいて有効となりそうな動きを試すことで、運動特性への理解を深めていったことが考えられる。単元の序盤はそのようにネオホッケー特有の動きを味わいながら、ドリブルにおける有効な動きに気付いたり、チームのパスの精度を上げたいという思いをもち始めたりした。そして2 on 1ゲームでは、それまで自身が高めてきた動きをゲームの中で表現していった。同時にB男は、自分の出番でなくとも、チームメイトや対戦相手の動きを継続的に注視した。その中で対戦相手のK男が得意としている「半歩ずらしてシュート」の動きを「うまい」と価値づけており、その後の自身の動きに取り入れてゴールを決めることがあった。また、ゲーム内容が3 on 2に発展した第⑤時では、対戦相手のK男からボールをキープして時間を稼ぐ守り方を伝えられた。「おお。確かに」と納得したB男は、ゲームの中で実行することでその有効性を実感するに至った。自分の実際の動きに取り入れ、表現できる技能の高さもさることながら、自分が見たものや他者との関わりをきっかけに見方や考え方を広げ、有効な攻め方や



図4 A子の守備の様子（赤④…A子 赤③…N男）

守り方についての思考を深め、運動への関わり方を変容させていったことは、B 男らしい学びの一つといえるだろう。

ゲーム中心の活動が進んでいくと、それまで「試合で勝つ」という目的に向かって個人の動きを高めることに重きをおいていた B 男は、徐々にチームの動きを高めることに焦点化していった。ゲーム前に作戦を共有する場では「守備の案があるんすよ」と、自分の考えをチームに主張し、先述の時間稼ぎ作戦の具体をチームに伝えた。また、チームとして攻め方を工夫したいというチームメイトのアイディアを受け、インターバルの過ごし方もチームの練習をくり返すことに変容していき、チームとしてゴール裏を使ったパスの練習を 8 回も試行した。その後も B 男は、「相手の戦法を研究しないと」と、手強い相手との対戦前にその練習の様子を分析的に見て、考えられる攻略方法や気をつけることをチームメイトに伝える場を自ら設定したり、コート内外で具体的な動きの指示をチームメイトに出したりした。チームとしての動きを高めることを中心に据えるようになった B 男は、単元終盤のチーム間ゲームにおいてもセーフティゾーンを使う攻撃方法と、2 人の守備者の内 1 人が前に出て、1 人が下がる方法を選択、共有し、勝利に向かっていった。その中で B 男は攻守における有効な動きについて、自身の技能をさらに高めるとともに、それらについて理解と思考を深め、動きや言葉で表現することを一体的にくり返し、運動への関わり方を変容させていった。また同時に、自他のよさについて理解を深めたり、その理解をもとにチーム内での自身の役割を変えていった。最終時には「作戦を立ててからが一番よかった」と振り返り、自身やチームの目的への向かい方を価値づけるに至った。

『その子らしく学ぶ』二人の抽出児の姿を見つめていくと、そこには一律的に教科学習をしているのではなく「人間性の涵養につながる経験」を一体としている子どもの姿があった。そして、そのような姿に、私たちはその子ならではの学びの豊かさを見出してきた。また「人間性の涵養につながる経験」には、「その子らしさ」に含まれる非認知能力などが紐づいていることが見えてきた。そこに『その子らしく学ぶ』その子をより豊かにする可能性があるのではないかと考えた。では、授業という営みの中にある「人間性の涵養につながる経験」は、教科の目標や内容等の習得とどのように関連・関係しているのか。こうした視点をもってその子にとっての「学び」を見とっていくことが『その子らしく学ぶ』研究をより価値あるものに前進させていくと考えた。

5 おわりに

授業において子どもがいきいきと『その子らしく学ぶ』姿を実現したい。こうした私たちの強い思いが、『その子らしく学ぶ』研究立ち上げの動機であった。この思いのもと、私たちは目の前の子どもを見つめ続けてきた。そして今、先述の「人間性の涵養につながる経験」を一体としながらその子の学びを豊かにしていく姿に、私たちは魅了されている。こうした子どもの姿を見出しつつあるのは、本校がこれまで大切にしてきた「まず子どもありき」という教育観を基盤とし、一人ひとりの教師が目の前の子どもに向き合い続けてきたからこそに他ならない。

研究 4 年次、『その子らしく学ぶ』研究はその集大成を目前にして重要な局面を迎えている。「人間性の涵養につながる経験」は、教科の目標や内容等の習得とどのように関連・関係しているのであろうか。これからも本校が大切にしてきた教育観のもと、教師一人ひとりが真摯に子どもに向き合いながら、『その子らしく学ぶ』を一層明らかにするべく、研究に邁進していきたい。